

2009年夏、日本山岳会学生部はふたつの海外登山を実施した。ひとつは、一昨年、宮下前会長が提唱して実現した日中韓三国学生交流登山の3回目で、今回は中国登山協会が担当して青海省の玉珠峰で実施された。本会からは7つの大学山岳部から9名が参加し、所期の成果をあげた（来年は日本で行なう予定）。

もうひとつは、学生部の有志6名によるネパールヒマラヤの登山である。マナスルの北、中国との国境に位置する未踏の6000メートル峰を、シェルパレスで目指した。さいわいサムド峰の初登頂には成功したが、目標としたパンボチエ峰には登れなかつた。

以下、ふたつの登山の概要を参考隊員が報告する。（吉永英明）

2009年夏、日本山岳会学生部はふたつの海外登山を実施した。ひとつは、一昨年、宮下前会長が提唱して実現した日中韓三国学生交流登山の3回目で、今回は中国登山協会が担当して青海省の玉珠峰で実施された。本会からは7つの大学山岳部から9名が参加し、所期の成果をあげた（来年は日本で行なう予定）。

もうひとつは、学生部の有志6名によるネパールヒマラヤの登山である。マナスルの北、中国との国境に位置する未踏の6000メートル峰を、シェルパレスで目指した。さいわいサムド峰の初登頂には成功したが、目標としたパンボチエ峰には登れなかつた。

以下、ふたつの登山の概要を参考隊員が報告する。（吉永英明）

この夏、学生部からふたつの登山隊が海外登山に挑戦した。日中韓三国学生交流登山隊と、ネパールヒマラヤ、パンボチエ登山隊である。海外登山が初めての隊員も多いだけに、得られた成果も大きかった。それぞれの登山の概要を報告してもらう。

日中韓交流登山と ネパールヒマラヤの未踏峰登山で 学生部が成果



2009年(平成21年)
10月号(No.773)
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価1部 150円
URL●<http://www.jac.or.jp>
e-mail●jac-room@jac.or.jp

目 次

日中韓交流登山と ネパールヒマラヤの未踏峰登山で 学生部が成果	1
「山の日」制定プロジェクト	
各支部中心に本格始動	4
豪雨から3年、「善六」沢に回復の兆し	6
登山界はいま――①登山形態の変遷	7
東西南北	8
『山岳』と会報『山』のこと	
哲学者G・W・F・ヘーゲルのアルプス紀行	
続・究極の歩行法	
ウェストンが自著をサトウに	
支部だより	11
山形支部／千葉支部	
活動報告	12
集会委員会／森づくり連絡協議会	
図書紹介	14
図書受入報告	15
会務報告	16
ルーム日誌	17
会員異動	17
新入会員	17
INFORMATION	18
山の博物館訪問	19
伯耆国山岳美術館	

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 10~20時
水・金 13~20時
第2、第4土曜日 閉室
第1、第3、第5土曜日 10~18時

以降の行動が話しかけられた。氷河を少し歩くもののBC(5050トメル)からC1(5600トメル)までは尾根を登るため、アイゼンの使用はC1以降になるということであつた。また各國隊員はA・B2隊に分かれて頂上を目指すことになった(私はB隊)。ミーティング後、みんなで約5100トメル地点まで歩いた。山裾には巨大なモレーンが押し出されており、その大きさに、ただ圧倒された。

23日、昼食後A隊5人がC1へと出発し、それに続いて残りの隊員で約5200トメルの小ピークまで歩いた。BCからは遠くA隊の姿が見えた。見るかぎりやさしい雪稜であった。太陽に照らされる玉珠峰は非常に美しかった。A隊登頂の報告を聞いたのは翌朝である。みんなで喜んだ。往復約13時間かかったという。

24日朝、B隊はC1入り。チベット出身を含めた中国隊員は高所に慣れているためか、私たちをリードしながら軽々と登っていくのに対し、日・韓の隊員は高所の影響を大いに受けていた。尾根上は風が強かつたが、なんとかC1に着くことができた。

25日、B隊の頂上アタック日(日本学生は3名、宮崎副会長が付添われた)。朝6時過ぎの出発であり、右側には雲海が広がつておらず、雪面が眩しかつた。雪面はとても歩きやすく、困難なところはなかつたが、眠気と頭痛、息切れと苦闘し、やつとのことで11時前に登頂することができた。登頂の嬉しさと同時に、もうこれ以上登らなくていい、という安堵感もあつた。

頂上はとても明るかつた。

無事にBCに下りて登山終了。その日のうちに、ゴルム市まで帰つた。26日は西寧へと1日かけて移動した。

翌27日、交流登山成功祝賀会が開かれた。一人ずつ登頂証明書を開け取り、豪華な食事を楽しんだ。

中国隊学生隊員とはこの日でお別れであった。英語でつたない挨拶しかできなかつたが、互いに別れの寂しさを共有していた。その後2日間、雨にも負けず歩く距離を延ばし、なんとか予定通り9月2日にBC入りすることができた。

8月19日、カトマンズに到着する。あわただしく準備を進め、24日にキヤラバンを開始した。その後2日間、雨にも負けず歩く距離を延ばし、なんとか予定通り9月2日にBC入りすることができた。

山岳会から吉永英明(三国登山担当)、宮崎絢一(副会長)、野口いづみ(医師)

パンボチエ登山隊2009
蔵本悠介

8月19日、カトマンズに到着する。あわただしく準備を進め、24日にキヤラバンを開始した。その後2日間、雨にも負けず歩く距離を延ばし、なんとか予定通り9月2日にBC入りすることができた。

あるアイスフォールはそれほど傾斜も強くなく、中心付近は崩壊も激しくない。うまくルートを繋いでいけば抜けることができるだろうと予想し、登攀ルートは予定通りソナム氷河を詰めて国境のコルまで上がり、そこから稜線を通り山頂を目指すことにする。

9月4日からルート工作を開始するが、天候に恵まれない。晴れても午前中だけで、午後から雨が

じて、実際に中・韓両国の登山の仕方や姿勢を垣間見ることができた。さらに彼らと直接話し、笑い合えたことは非常に貴重な体験であつた。海の向こう側で同じく登山を行なっている彼らを忘れずに、自分もいつそう強くなりたいと思う。

最後に、貴重な機会を与えてくれたJACの皆さんに感謝したい。

【参加隊員】山口尚紀・佐竹佑哉・柴山雄太(同志社大)、鈴木良隆(南山大)、高橋俊拡(中央大)、小坂健一郎(京都府立医大)、竹中雅幸(京都府立大)、岡部岳人(京都大)、辻知里(関西学院大)、日本ルート偵察の結果、C1までに



韓国、中国の学生と交流した玉珠峰登山隊



未踏の6000メートル峰、パンボチエ

降り出すと氷河の崩壊が激しくなるうえに、気温が低いため体が濡れ体調を崩しそうだ。少ない晴れ間を狙つて少しずつルートを延ばしていく。アイスフォールの下部は比較的安定していて落石も少ないが、上部は懸垂下降や垂直に近い氷壁もあるうえ落石も多く、手こずつた。アイスフォール突破に予想以上のピッチ数と時間がかかり、9月11日によくやく設営できたC1は、アイスフォールを抜けてしまふの4600メートルあたりだった。

C2設営予定の国境コルまでは特別難しいところもなく、ヒドンクレバスに注意しながらタイトロープで進むことができた。9月14

日に5600トル地点の国境コルにC2を設営し、宿泊。次の日にサムド峰(6335トル)に偵察に行くと、サムドは予想以上に近くに見える。このぶんだとサムドもパンボチエ(6620トル)もC3を設けずに登頂できるだろうと意気揚々とBCまで戻った。

5900トルまで上げるために1日使った。

こうして迎えた9月22日。パンポチエアタックの日は朝から雪が激しい。メンバーの疲労も激しいので、一度BCまで下つて態勢を立て直すことにする。

かで入り混じる。しばらく休憩しもと来たルートを引き返す。いつの間にか天候も悪くなり、サムドピークに戻るころには吹雪へと変わっていた。

翌日BCへと戻り、隊荷整理の後、10月1日から帰りのキャラバンを開始した。

そして、キヤテバンの2日目に初めて写真ではなく実際のパンポチエの全景を見た。雄大で凜々しいよい山だな、というのが率直な感想だった。数日前まで自分達があの主稜線にいたことが信じられないとともに、敗退したリツジを見るとやはり悔しかつた。

その後のバックキャラバンも含め、天候に恵まれぬ登山であつたが、そのなかでも自分たちのできる限りのことはやつたと思う。

る限りのことはやつたと思う。
今回の遠征で得たさまざま経験を各大学に持ち帰つて今後の活動に繋げるとともに、ほかの大学へも刺激を与え、日本山岳会学生部の活性化に繋げたい。

【参加隊員】 隊長 || 藏本悠介(中大4年)
副隊長 || 山本大貴(関学4年)、隊員 || 小谷紘平(同志社4年)、中務成哉(同志社3年)、亀岡義高(中大3年)、中塚大佑

悔しさと安堵感が隊員各自のな

部の活性化に繋げたい

谷紘平(同志社4年)、中務成哉(同志社3年)、亀岡義高(中大3年)、中塚大佑

(上智2年)

トピックス

「山の日」制定プロジェクト 各支部中心に本格始動

常務理事 成川隆顕

日本山岳会（JAC）はこのほど「山の日」制定プロジェクトを本格的に始動させました。10月1日付で活動の趣旨を一般に向けてアピールするとともに（全文は次ページ参照）、今後、全国の28支部をあげて「山の日」にふさわしいプロジェクトを推進していきます。

日本山岳会（JAC）はこのほど「山の日」制定プロジェクトを本格的に始動させました。10月1日付で活動の趣旨を一般に向けてアピールするとともに（全文は次ページ参照）、今後、全国の28支部をあげて「山の日」にふさわしいプロジェクトを推進していきます。

号の会報『山』で、宮下秀樹前会長が『山の文化を伝える「山の日」プロジェクトにパワー結集を』と呼びかけ、尾上昇会長が今後の重要課題として引き継ぎました。9月の支部長会でも熱心な意見交換がされ、会としてまとまって具体的な行動に入ろうとしています。

「山の日」と銘うつた催しや行動計画は、自然保護や森づくり、環境問題として捉えられ、すでにいくつかの県や地域単位で実施されています。JACのプロジェクトはこれらと競合するものではありません。むしろこれまでの積み上げをベースにしてパワーアップを図り、より多くの人たちを活動に誘い込むものです。

日にちの設定も、当面、6月から8月にかけての夏山シーズンと柔軟に考え、各支部で最も適切な日を設定していいと思います。これまでの恒例行事を「山の日」プロジェクトと位置づけ、心構え

このプロジェクトは、登山愛好者の集まりであるJACが、山に登ることの楽しさ、厳しさだけでなく、山と森林が国土の70%を占めるわが国で、山の大切さ、山の恩恵をより多くの人たちに伝えるため、活動することを目的にしています。国民祝日としての「山の日」制定を目指していますが、そこまでの過程で、豊富な登山経験を持つているJACのパワーを生かそうということです。今年1月

も新たに取り組むのも一案です。繰り返しになりますが、JACとしては毎年6月から8月にイベントを中心させて、祝日としての「山の日」制定へつなぐことを期したいと思います。念のため書き添えますが、わが国の祝日は「国民の祝日に関する法律」によって決まる「国会マター」です。

具体的な取り組み

「山の日」の制定に向けて、まずは山と親しみ、楽しみ、山から学び、山の自然を守り育てるプロジェクトを開拓したいと考えます。JAC本部と支部が力を合わせ、日本山岳協会や日本勤労者山岳連盟などの山岳団体をはじめ、自治体、地域団体、関係者と連携・協力して企画を練り、すみやかに実

「山の日」制定目指す

日本山岳会

「海の日」があるなら、「山の日」もある。日本山岳会は30日、國民の祝日として山の日の制定を目指すと発表した。同会によると、山の日の候補に挙がっているのは、年間を通じて最も登山客が多い夏。具体的な日付は未定だが、同会では、他の山岳団体などと連携して制定に向けた機運を高めながら、特定の日を選定していくたいという。

△関連記事連動面▽

「山の日」の創設は、国連決議で「国際山岳年」と定められた2002年にも、山岳関係者の間で提案された。しかし、その後は盛り上がりを欠き、尻すぼみになってしまった経緯がある。

昇会長は、「自然環境の変化が憂慮される今だからこそ、山を愛する心を広めたい」と話した。

10月1日付読売新聞の社会面

プロジェクト・チーム

JACの理事会のもとにプロジェクト・チームを設置します。統括II藤本副会長、リーダーII成川常務理事、メンバII堀井、山川、永田、萩原(以上理事)、江本嘉伸、谷久光両会員の8人です。9月30日に初会合を開きました。このメンバーに、年明けから、次の7つのブロック代表が加わります。

- ①北海道、②東北6支部、③東海・静岡・信濃支部、④中央5支部(京都・岐阜・福井・石川・富山)、⑤関西支部、⑥広島・山陰支部、⑦九州5支部。

すでに全国28の支部に「山の日」

担当者が決まっています。また、右記7ブロックの代表を、なるべく早く選ぶようにします。越後、山梨、関東の3支部および首都圏は「本部というブロック」のなかに含まれると考えてください。

こうしてできたプロジェクト・チームは、各支部長(全国支部長会)と緊密な連携をとり、ほかの山岳団体、関係省庁、森林管理署、地方自治体、学校、鉄道・運輸輸送企業、観光業者、山小屋、森林管理署などへも働きかけていくことになります。

今後の活動内容

本部、支部における活動(イベンント)として、以下のようないものを考えています。

①登山活動II市民登山・ハイキング、親子登山(幼児対象)、登山教室など。

②文化活動II講演、シンポジウム、図書・写真・絵画展・スケッチ会など。

③環境保全活動II森づくり、里山その他、新聞、テレビ、雑誌、ミニコミ、口コミ等を通じてのPR活動は重要な要素です。

名前は『山の日』制定プロジェクトとなつますが、当面、『JACとしての「山の日』を作り育てるプロジェクト』といったほうが実態を表わしていると思います。国民祝日としての「山の日」を視野におきながら、年月をかけて、プロジェクトを継続・展開することが肝要だと考えています。

創意と工夫——。それぞれの特色、地域の特性などを生かしてのプロジェクトに会員の皆さんのが加をお願いします。

「山の日」制定アピール

わが国土は7割近くが山であり、その多くを森林が覆っています。

古くから日本人は山を信仰の対象としてあがめ、森林の豊かな恵みに感謝し、自然とともに生きてきました。山の恩恵は渓谷の清流を生み、わが国を囲む海へとつながり、美しい山なみは豊かな心を育んできました。わが国の文化は、『山の文化』と『海の文化』の融合によってその根幹が形成されてきたといわれています。

わが国に「山の日」をという呼びかけは、2002年の国際山岳祝日としての「山の日」の制定を提案します。「山の日」は、日々の生活と文化に結びついた山の恵みに感謝するとともに、美しく豊かな自然を守り、育て、次世代に引き継ぐことを国民のすべてが銘記する日です。すでに祝日となつている「海の日」と対をなして、日本に住むすべての人々が、山といふ自然を見つめなおし、深いかかわりを考える日にしたいと思います。

わたくしたちの提案趣旨に賛同され、より多くの人々、団体より、ご理解とご支援、ご協力をお願いいたします。

(平成21年10月1日)

レポート

豪雨から3年、「善六」沢に回復の兆し

山研管理人 内野かおり

上高地周辺には男性の名前の付いた地名がいくつもありますが、それは榎人の名からだと言われています。では、「善六」をご存知の方はいらっしゃるでしょうか。

これは西穂側の山々の水を集め梓川に注ぐ、山研の水源の沢の名前です。上高地のほかの施設は、沢の水と水道組合から引く水を併用したり、井戸水を使っていますが、山研はすべて「善六」沢から取水しています。500メートル離れた水源からひかれたパイプで一旦タンクに溜めた水を、飲料水、炊事、トイレ、風呂、洗面などに使っています。蛇口をひねれば湯水が出て、温かいシャワーや水洗トイレを備えた山研ですが、そのおおもとをたどるとサラサラ流れる沢に行きつきます。その沢が「善六」です。

沢ですから雨が降り続くと当然濁り、タンクへの取水は中止、溜まった水だけでまかなわなければなりません。人がすっぽり入れる

ほどの大きなタンクですが、節水を気にせず使えば、10人の宿泊客がひと晩で使い切ってしまう量です。山研と深い関わりをもつ「善六」沢も榎人の名から付いたようで、私たちは「善六」おじさんと呼んでいます。

多少の雨でも平気な顔をして清流を送ってくれていた「善六」おじさんですが、2006年7月の豪雨から様子が変わってしましました。この豪雨は、長く上高地で働く人が「30年から50年に1度の大震」というほどで、荒れ狂った「善六」おじさんは散策路にかかった橋を押し流し、河原をえぐり、両岸の緑の笹原を土砂で埋め尽くしてしまいました。上流にある水源付近の地形も一変し、それ以来少しの雨でも濁りやすくなつてしましました。



山研の水源確保に貴重な善六沢。両岸に笹が増えてきた

ことが何度もありました。今年度前半は、盆前に天候が安定するまでこの「善六」おじさんに振り回された感がありました。

そんな7月下旬の週末、15人ほどの団体が2泊した日、雨天のため取水ができませんでした。10人がひと晩で使ってしまうタンクの水を、のべ30人の生活水にあてなければなりません。風呂は他施設の外来入浴を利用していただき、こまめに水を止める、水を節約するため紙皿、紙コップの使用をお願いしました。しかし、厄介なのは一度に大量の水を使う水洗トイレ。こればかりはトイレに行く

回数を減らしたり、流さないというわけにいきません（男性用の小便器は流さないようにお願いしました）。そんな不便さにも、「टेंटにいると思えばいいさ」と、ころよく協力していただき、2泊3日をしのぐことができました。また、今年は平日の宿泊者が増えました。会員の中に退職された方が増え、週末でなくとも出かけられるようになつたからかもしれません。夏は天気の悪い日が多くたせいか、登山目的の宿泊者も少なかつたようで少し寂しい気がしました。山研の利用の仕方や目的一も少しずつ変わってきたことを実感しました。

そんな今年の夏、嬉しいニュースもあります。それは3年前、土砂に埋まり、一面砂浜のようになっていた「善六」沢の両岸に、また笹が増えてきたことです。豪雨以来、すっかり気難しくなつてしまつた「善六」おじさんですが、以前の穏やかな姿へ回復の兆しが見えてきました。完全回復までこの先何年、何十年かかるかは分かりませんが、ご機嫌伺いしながら気長に付き合つていきたいと思います。

登山界はいま――

①登山形態の変遷

神崎忠男

ある資料によると、わが国の登山人口は650万人とも800万人ともいわれている。このなかで

登山組織、団体は日本山岳会が約5300人、日本山岳協会6万6

000人、日本労働者山岳連盟が3万5000人、日本ヒマラヤ協会が600人、そして、登山団体というより山岳環境団体の日本ヒマラン・アドベンチャー・トラスト（HAT-J）が900人、また山岳文化学会が500人と、山岳主要団体に属している登山者はおおよそ10万8500人である。

登山人口に占める組織登山者の割合はわずかに1・5^{セント}、ほとんどが未組織登山者といつてよいであろう。

推定登山人口の650万人は、山登りが一部の人ものではなく、野外リクリエーションとして一般に親しまれていることを示す数字である。ここで使われる「登山人口」は、登山、山歩き、ハイキングと、ランク分けして使われては

いるものの、自然に親しみ、ザックを背負えば「登山」のカテゴリーでくくられる数字である。

これだけの登山人口があるのに、組織、団体の会員数は減少の一途

をたどっている。中高年登山、ツアーディン、カルチャー登山など、従来の山岳組織とは別の登山者が増えたとみることができよう。山岳会に属さない人が百名山踏破をはじめ、自分の実力、環境にあつた目標を設定し、チャレンジしてそれなりの達成感や楽しみを味わっている。

いまや登山は限られた人のものでなく大衆登山化した。国民祝日としての「山の日」を制定して、自然、山地、里山に触れ合うきっかけをつくり、生活に密着したモラル、マナーの啓発、エコ・ライフルへつながればと思う。

登山の今昔を見ると、時代に伴つて登山の変貌、登山界の変遷がうかがわれる。当然、登山が変われば登山組織も変わってくる。信

仰、宗教登山から探検登山、そしてスポーツ登山、競技登山、健康登山（中高年登山）と、登山の多様化に伴つて変化していく。

1900年代、未踏峰、未踏のルートから高峰を目指した時代を近代登山、1980年ごろから2000年代を現代登山と分ければ、未知への追求、パイオニアワークの時代から自然との調和、いわゆる自然保護への精神が強く求められる登山へと変わり、登山者の年齢、登山人口に大きな変化がみられる。最近は登山を商品にして、お金を出せばエベレストの頂上にも登らせてもらえるという商業登山までがお目見えした。

登山環境が変わったという認識に立つて現状を把握し、これから登山を展望して、いまの時代にあつた登山活動を開拓するために、特に団体、組織の幹部は、目を見開いて登山界の将来を考えるべきだろう。

昔は登つても、今は、ハイキングすら敬遠する人、昔のイメージでしか登山、登山界を捉えようとした人には、退いていただけほかないと思う。わたし自身、偉なことを言える立場ではない

が、繰り返せば、役員など指導的立場にある人には、登山の変化、登山界の変遷、時代性などを強く意識して登山や登山界に携わるべきと思っている。ただし、伝統とか実績、モラルやマナー、登山者気質など昔のいいところ、よき時代の摂理などは今に生かし、新しい登山の環境づくりの礎にもしたいものである。

このところ日本山岳会に次いで日本山岳協会でも、意欲的な登山隊への助成金制度が若い人たちに喜ばれている。応募してくる登山隊、登山者をみても、かなり高度な技術を要する登山、高度な実力を求められる登山計画が見られる。結果、フランスのパリで開かれたピオレドール・ゴールデン・ピッケル賞（会報『山』769号参照）には、日本の若い登山隊が3隊ノミネートされ、そのうちの2隊が優秀登攀賞を受賞している。

大衆化と先鋭化の二極をにらみ、百年余のよき伝統を生かしながら、会員として誇りと自信をもち、いつの時代でも、ゆるぎない存在感を持つ続けるために、JACがどのような進路をとるべきか考えて

会の成立は、明治35年の夏に初めて槍ヶ岳に登った小島烏水を中心に、当時の植物、昆虫学者の武田久吉、高野鷹藏、梅沢親光、河田黙らの日本博物学同志会の一団それに高頭仁兵衛、城数馬らが加わり、いわば七人の侍たちの発唱により明治38年秋に山岳会と称して活動を始めた。

そして翌39年4月、機関誌『山岳』の第一年第一号が誕生した。表題については、はじめ「雲表」最終的に「山岳」に落ち着いたようである。また、この年報に注が

[三] その報と題す

鈴木正規

れた同人たちの熱意と愛情のほどが装幀、表紙と口絵、扉などにうかがうことができる。

第一年の表紙画で、尖峰に鷹の

年報「山岳」は、日本でいちばん古い歴史をもつ日本山岳会の機

会の成立は、明治35年の夏に初めて槍ヶ岳に登った小島鳥水を中心的に、当時の植物、昆虫学者の武田久吉、高野鷹藏、梅沢親光、河田黙らの日本博物学同志会の一団

それに高頭仁兵衛、城数馬らが加わり、いわば七人の侍たちの発唱により明治38年秋に山岳会と称して活動を始めた。

そして翌39年4月、機関誌『山

表題については、はじめ「雲表」
岳」の第一年第一号が誕生した。

「山岳雑誌」などの声もでたが、最終的に「山岳」に落ち着いたようである。また、この年報に注が



1906(明治39)年創刊の「山岳」第1年第1号の表紙

東西
南北

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度でお願いします）

代登山史そのものといえる。初期の大半が日本アルプスを対象に書かれたのに対し、大正時代に入ると会員の目指す地域が拡大したのに加え、登山形式にも多くの変化が見られる。そして、登山者層もより若い世代へと引き継がれ、特に学生を中心とする積雪期登山の隆盛には目覚しいものがあつた。

第三十四年（昭和14年度）に初めて立教大学によるナンダ・コット遠征記録が掲載されたのを皮切

ヘーゲルのアルプス紀行文の存在を知ったのは恩師であるヘーゲル研究の権威、京都大学名誉教授・加藤尚武先生のご教示による。さつそくドイツ語原文を捜し出し読みでみたがなかなかおもしろい。

ヘルゲルの辿ったルートはベルンからトゥーン、インターラーケンを経てグリンデルワルトへ、それからマイリングエン、グリムゼル峠、アンデルマットを経てルツェルンへと至るもので徒步旅行だった。時は1796年7月から8月ヘーゲル25歳。日記として書かれているのは7月25日から31日までの7日間の行程である。

当時はアルプス登山の幕が開き始めたころで、モン・ブランの初

全巻を入手することの難しさは相当なものと思われる。

また会報『山』は昭和5年10月に第一号が創刊発行され、昭和40年

3月までは年6回の発行であつたその後、昭和40年4月から月刊発行となり、現号まで続いている。

哲学者G・W・F・ヘーゲルの アルプス紀行

田中純夫

書簡』という旅行記で旅行前の下調べをしている。

さてその内容だが、観察が極めて細かく客観的である。アルプスの高峰から氷河・雪崩の観察、森林、高原、草花への言及からチーズ製造工程のメモ、有名な滝の観察から歴史・民俗・経済・政治形態への言及、言語論あり、文化論あり、美学あり、産業論ありで極めて多岐にわたっている。

こうしたしつかりした記述からまず気づくのは彼自身がアルプスで得た新しい経験、体験で興味をかきたてられ、感動しているということ。山はどんな角度から見るとその高さや崇高さを感じるのか、雪崩は尾根の上からの雪の落下とは違うことなど。山の紀行文で大切なのは本人が感動しているということであり、この点ヘーゲルの感動が直接に伝わってきて、そのため当時の山の息吹き、旅の息吹きを今日のわれわれも感じることができる。

しかし、またそこには哲学者ヘーゲルの後年開花する資質が見え隠れもする。つまり現象の背後にまで見透す力。当時、カントなどによつて確立

された崇高論、崇高の美学などが展開され、山岳美觀なども認識されるようになつてきていた。これはヘーゲルと同時代のロマン主義美学へと発展していくのだが、ヘーゲルはあくまでも幻想的なロマンチズムをいつさい排除している。したがつて山岳や氷河の崇高さ、偉大さといった観念に対しても極めて冷静である。それはまた山の住人は純朴である、という幻想についても同様で、彼はその山の住人たちの打算も見事に見抜いている。

また自然の猛威とそのなかの小さな人間という問題については、当時はやつていた安易な自然神学的な人間中心主義、人間の有用性を否定し、そうした幸福主義的なヨーロッパ人の虚栄と傲慢を当時のヨーロッパ人の思いあがりと痛烈に批判している。

また滝の観察もおもしろく、彼は永遠の変転のなかにおける全体の同一性を読み取っている。

このアルプス紀行は、山旅の営みと思索の営みの切り結ぶ地点で書かれた紀行として、おもしろい文献のひとつには入ると思う。

続・究極の歩行法

小笠原 寛

『山』767号で紹介させていただいた合氣道から開発した「新武藏流歩行法」はバランスとパワーを格段に向上させることを、カトマンズ在住の戸張至聖氏らとのマナパテ6380^{メル}登山で確認しました。

これは腰を使つたすり足歩行ですでの、クランポンの爪の後が雪に残りますが、足の引っかかりや抵抗感はなく、股を上げる通常の足運びと比べ省エネでした。また、ダンパスピーカやトロン峰の長い下りは大股でも膝が痛むことがありませんでした。シエルパの脚は細く柔らかく、股からでなく膝から始動し腰で歩いています。ただ膝始動では歩幅は小さく膝を痛めやすいと思います。腰を使つた走りの強さは、ジャマイカのボルトやサッカーの世界の有名選手にみられます。

登山でも腰を使つた歩行がよく、その習得とどの筋肉をどのように鍛えるかが課題です。

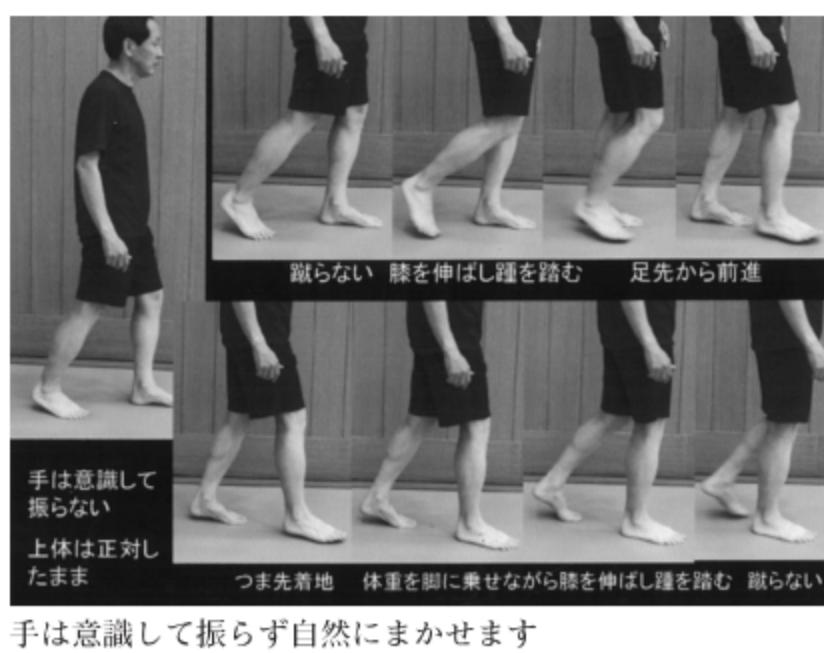
「親指の付け根」に重心を置き、ここを常に意識し、ここから始動して歩くのは実技指導すればすぐに理解できますが、文章では難しいようです。次ページに写真を掲載しておきます。参考になさってください。

股を使わずに足先から気持ちよく地面をはわせるように前へ進め親指の付け根で着地し、体が脚まで来ると膝を伸ばしながら踵に体重をかけます。足先に意識がありますのでつまずきや捻挫は起ります。気持ちはよく「スー」とスケリにくく、無駄な蹴る動作は不要です。気持ちはよく「スー」とスケ

一トのような感覚で足を前へ走らせ体重を乗せます。年をとった方には、股を上げないこの歩行法は樂なため理解しやすいようです。

武藏の五輪書に「足のはこびようの事、つま先を少しうけて、きびすを強く踏むべし、足の使ひよう、時によりて大小遅速はありとも、常に歩むがごとし」とあり、すっかりこのような足運びになりました。

「きびすを踏む」は、階段で実験をするとよく分かれます。ステップに足を浅くかけて脚に体重をゆっくり乗せながら膝を伸ばしますと、土踏まずがステップの角に押しつけられ、靴底の弾力も加わります。



体がスッと持ち上がりります。平地より緩い坂の方がきびすを踏む感覚がよく分かれます。これが身につけば、山中だけでなくアプローチもずいぶん楽しくなります。

腹式呼吸は息を口から吐き、鼻から吸います。咽を拡げ、ゆっくり息を吐くと「ハーハー」と、口を閉じ鼻から吸うと「スー」と、で空気が振動し、音が発生します。軽く目を閉じ耳を澄まし、1分で3呼吸程度、声帯で音を作れば痛みますので間違いに気づき、きれいな音が発生するようになれば習得できます。

登山では息を吸う時間を短くして大きく吸い、吐くのは自然にまかせた方がリズムがよく、標高5000メートルにもなるとラジオ体操の深呼吸は役に立ちません。急坂でも時どき大きく息を入れれば「ハーハー」の非効率な息づかいはなくなります。

今回は触れませんが、合氣道の使い方はロッククライミングにも有用です。高所登山には呼吸法と歩行法は必須で、これらを研究され、楽しんで下さい。

ウェ斯顿が自著をサトウに

田畠真一

1896(明治29)年11月、ウエ斯顿は自著『日本アルプス

—登山と探検』をアーネスト・サトウに献呈していた。前掲書にはウェ斯顿の署名が入っている。

「アーネスト・メーソン・サトウ閣下に対し、著者の敬意を込めて、1896年11月」(拙訳)。この点については、島田巽らのウェ斯顿年譜(『W・ウェ斯顿年譜』『山岳』第八十二年)にも記事がない。

また、右記の献呈本については、平成19年10月20日から同年12月9日までの間、松本市立博物館で開催された小谷コレクション展(松本市市制施行百周年記念事業)における展示資料のひとつであり、目新しいものだつた。つまり、前記の『日本アルプス—登山と探検』は小谷隆一の旧蔵本であり、現在では信州大学が所蔵する。

実はこの自著こそ、かつて小林義正が旧蔵した同一本だつた。こ

れは私の推定だ。その理由であるが、小林の次の記事があるからだ。

「しかるに私の所蔵するそれは(田畠注、ウェ斯顿の自署)おなじ署名本でも、ウェ斯顿からSir Ernest Mason Satowに献呈された一本だということである」(小林義正著『山と書物』)。

所蔵者の流れを確認しておこう。自著はウェ斯顿から、サトウへ。さらに小林の手に渡り、さらにまた小谷の手に。その後、信州大学の所蔵へと。こう推測できると思

支部



山形支部

フォトクラブ「心に映る山々」

酒田展開催

恒例となつた日本山岳会フォトクラブの写真展「心に映る山々」を、7月29日から8月4日まで山形県酒田市の総合文化センターで開催しました。

飾りつけはフォトクラブ副委員長・川島新太郎氏と地元のフォトクラブ会員2名、および山形支部会員の力を借りて、前日の午後3時から行ないました。7回目の開催ともなるとパーテーションの組み立ても手際よく、2時間あまりで飾りつけができました。

作品の展示順序はより見やすいように、作品目録順にしました。

今年で7回目の開催ですので、すつかり市民の間に定着したようです。とくに山の仲間と山岳写真愛好者が心待ちにする写真展になり



市民の間に定着し盛会であった写真展

だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとリポートします。

千葉支部

山岳映画と講演会

9月27日、羽田栄治氏による山岳映画と講演の会を行なった。支

ました。

17年の歴史を重ねたフォトクラブの写真展はレベルが高く、作品目録を手に足を止め、熱心に鑑賞される市民も多く見られました。

なかには撮影データなどについて質問を受けることもありました。酒田市は写真界の大御所・土門拳生誕の地であり、写真への関心の高さがうかがえました。

なお、写真展開催期間中の来館者は3000人を超える、多くの市民から行ないました。7回目の開催ともなるとパーテーションの組み立ても手際よく、2時間あまりで飾りつけができました。

今年で7回目の開催ですので、すつかり市民の間に定着したようです。とくに山の仲間と山岳写真愛好者が心待ちにする写真展になり

民に鑑賞していただきました。

(菅原恒男)

の貴重な記録である。73年前のフ

イルムはさすがに「雨降り」が目につくが、それが歴史の重さを感じさせる。記録映画を撮ったのは大阪毎日新聞社の竹節作太、カメラはアメリカ製の「アイモ」35ミリの撮影機である。

後日、一般参加者の一人から次のような感想が寄せられた。「世界一線級の本格的な登山の映像や記録など私は今まで縁遠いものでしたので、新鮮な好奇心と感動をもつて見聞することができました。よい機会を与えてくれた日本山岳会に感謝します」 (篠崎仁)

峰』と『ナンダコット征服』。『チヨゴリザ花嫁の峰』は、1958年、京都大学学士山岳会によるカラコルム山塊チヨゴリザ(7654メートル)の登頂記録である。桑原武夫隊長のもと、藤平・平井両隊員が登頂した。50年前の撮影とは思えないきれいなカラー映画である。いま画面に映し出されたばかりの隊員の一人である芳賀孝郎氏(千葉支部顧問)が目の前で解説すると、会場から感動の声があがつた。

『ナンダコット征服』は、1936年、立教大学隊(堀田弥一隊長)による日本初のヒマラヤ登頂成功

ドロミテの山旅

今回の山旅、集会委員会の企画で、前年の調査を経て実施された。ねらいは三つ。世界自然遺産のドロミテ山塊の旅、ヴィア・フェラータの体験、ドロミテ最高峰マルモラーダの登頂である。以下に報告したい。

このドロミテ山塊、地球の奇観のひとつ。奇怪な岩峰、岩壁、ドームがあちこちに屹立する。幾重にも囲まれた岩の円形劇場の底にいるような気になる。やはり人間は自分の身の丈で自然に接すべきで、そうすると日本の自然景観のなかで育ってきたわれわれは、この迫りくる岩のお化けとどう折り合いをつけるべきか。しかもその岩塊の麓にはのどかで瀟洒なアルプスの田園風景が広がっているのだ。

ヴィア・フェラータとはルートに張られたワイヤーにカラビナで自己確保しながら登攀するもので、安全性を伴った岩遊び。ドロミテが発祥の地で、今や欧州各地に広まりつつある。日本にはあまり馴染みのないもので、これを普及したいとのねらいであった。山小屋をベースにクリスタリーノ・ダンペツツオ(3008メトル)とチーマ・ディ・メッツツオ(3154メトル)にそれぞれ登頂した。

ドロミテの山旅

今回の山旅、集会委員会の企画で、前年の調査を経て実施された。ねらいは三つ。世界自然遺産のドロミテ山塊の旅、ヴィア・フェラータの体験、ドロミテ最高峰マルモラーダの登頂である。以下に報告したい。

このドロミテ山塊、地球の奇観

のひとつのひとつ。奇怪な岩峰、岩壁、ドームがあちこちに屹立する。幾重にも囲まれた岩の円形劇場の底にいるような気になる。やはり人間は自分の身の丈で自然に接すべきで、そうすると日本の自然景観のなかで育ってきたわれわれは、この迫りくる岩のお化けとどう折り合いをつけるべきか。しかもその岩塊の麓にはのどかで瀟洒なアルプスの田園風景が広がっているのだ。



参加者18名中15名が登頂した、マルモラーダ山頂

最高峰マルモラーダ(3343メトル)へは氷河を登り、岩溝をフェラータで登攀して頂上雪田へ。一部氷化しているなかを登つて、平均年齢68歳の18名中15名が登頂。同ルートを下山。さして困難なルートではないがやはり最高峰はいい。今回のハイライトとなつた。

麓の山小屋には戦争博物館が併設されていて、第一次世界大戦中のドロミテ山塊での山岳戦争の模様を書物や資料で伝えている。戦場となつたドロミテには岩壁のあちこちに要塞や塹壕が築かれていて、それらの移動ルートをもとにフェラータのルートを作られてもいる。自然に驚くばかりでなく、

さて、日程最後は世界文化遺産のベネツィアへ。岩塊のなかから抜け出し、葡萄畑の緑、トウモロコシ畑の黄色のなかを一路南下して陽光煌めく観光都市へ。そこはかつてゲーテが「そこで私に何よりもまず迫り来つたものは民衆である。大いなる群衆であり……」と語っているように、群衆の渦巻く光の透明な美しい海上都市だつた。夜のゴンドラを楽しみ、翌朝は水上タクシーの高速クルージングでアドリア海を一路空港へ。

ドロミテの山旅は海のルートで終わりとなつた。

(田中純夫)

——ドロミテの山旅 田中朝子

ドロミテの登山に焼けし腕さするコルチナの街の灯りの涼しかり

下山してベニスの夜涼たのしめる

歴史の悲惨さにも心痛める旅となつた。



森づくり連絡協議会――

森林消失に歯止めを

各地の支部で森づくりをやるところがふえてきた。なぜだろう。地球環境問題は、生物多様性にしろ、CO₂抑制策、水源涵養、土砂災害の防止、あるいは熱帯雨林の消失防止にしろ、すべてが森林生態系の健全性にかかっている。これが崩れると環境は保てない。「文明の前には森林があり、文明の後には砂漠が残る」(フランソワ・ルネ・シャトーブリアン。1768～1848)――。日本でも、世界でも森林の消失は加速している。このまま手を打たないでいくと私たちの子孫に未来はない。

そこで、森林消失を食い止める活動をして、少しでも公益に役立とうという機運が盛り上がってきたのがJAC各支部の森づくりである。

森づくり活動の下地には難しい勉強があり、重労働と危険を伴う労働体系や技術があること、費用がかさむ事業であり、地図の空白部を行くような摸索、試行があるなどいろいろな問題がある。このため各支部の森人が集まつて知恵を出し合い、協力して進もうといふことで、2007年秋に河西瑛一郎氏(高尾の森づくりの会代表)から私に働きかけがあつた。相談の末、「森づくり連絡協議会」を立ち上げたのである。

3回目までの集会は次のように実施してきた。

第1回 2008年1月 東海支部(橋村一豊) 猿投の森

第2回 2008年8月 岐阜支部(早田道治) 権現の森

第3回 2009年2月 東海支部(橋村一豊) 猿投の森
(会報『山』767号に報告あり。カッコ内は司会者)

第4回は8月29日、東海支部のルームで開かれた。参加者は、三上伊佐男(福井)、前垣寿男(広島)、斧田一陽(関西)、井原哲士、明井克子(京都)、早田道治支部長ら5名(岐阜)、河西瑛一郎代表ら7名(高尾の森)、橋村一豊代表ら8名(東海支部、猿投の森)。それには本部から藤本副会長、成川常務理事、以上の27名である。都合で欠席の山形支部、千葉支部、宮崎支部からは、それぞれ文書で意見が寄せられた。

会議は私が司会進行して進められ、「森づくり連絡協議会の公式機関について」を主要テーマに、ほぼ5時間にわたり集中的に論議を交わした。

審議は、前もって私が示していた試案をもとに行なわれた。

橋村案は「本協議会の位置づけ」「代表などの選任、運営方法」「公益法人化への協力」などにわたるもので、

- ①森づくり連絡協議会をJACの公式機関と位置づけて理事会直轄とし、担当理事を通じて運営、予算化をサポートする。
- ②森づくり連絡協議会は幹事若干名を選出し、各支部の森づくりの会と協議・相談して必要な対策をまとめ、担当理事を通して理事会に意見、要望を提出する。理事会はこれを審議し必要な措置をとる。
- ③森づくりは事業であり、相当な経費を必要とするので、各支部の森づくりの会から妥当な資金の要望がある場合、内容に応じた助成金を交付する。
- ④森づくりのやり方は各地方により事情が異なるので、それらを勘案し、地方支部の独自性を尊重し

て進める。理事会は企画、運営、活動内容に過度の干渉をしない。

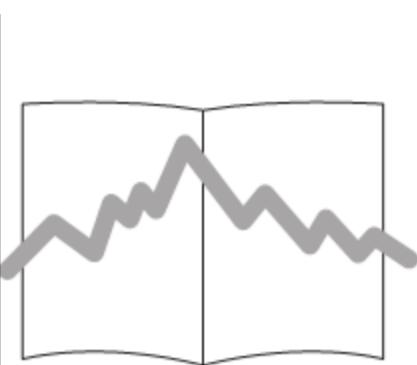
⑤JACの公益社団法人化に当たっては、社会的インパクトと公益性の大きい森づくりの意義を十分理解、活用すべきだ。山岳会の会員だけでなく、青少年や一般市民からの参加が望ましい。ただし、基本方針の策定や主要活動のリードーシップはJAC会員が管掌することが必要である。「山の日」制定プロジェクトで果たす役割も大きい。

などとなつており、この試案をめぐつて活発な意見交換が行なわれた。

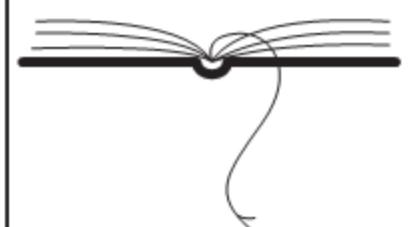
その結果、①については、組織論からいえば山岳会内に「森づくり委員会」を発足させるという認識で一致し、近く②以下の要件を盛り込んだ連絡協議会としての要望書を、会長宛提出することになった。

次回(第5回)は来年の1月下旬に京都支部所管で開催する。京都支部は今年度に入つて、琵琶湖やJR山科駅に近い滋賀県の藤尾の森県有林で森づくりをスタートさせている。

(橋村一豊)

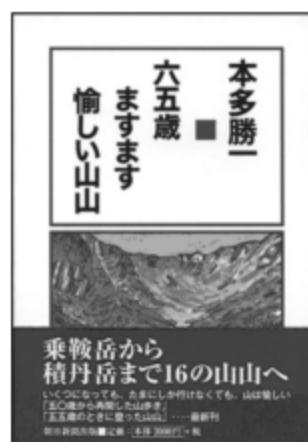


図書紹介



本多勝一・著

『六五歳 ますます愉しい山山』



2009年6月
朝日新聞出版刊
A5判 156ページ
定価 2100円

ろうか。

ひとつは、あまり知られていない

山が紹介されている場合。なかなか行けない地域の山行記や登攀記録、隠れた名山の紹介は興味深い。もうひとつは書き手の個性が

前面に出ている山行記で、本多勝一氏のこの近著は、後者に当たる。前面に出てている山行記で、本多勝

一氏のメセージ、「まだ現役。タ�타ルを見ると、同世代の読者

へのメッセージ、「まだ現役。タ�타ルを見ると、同世代の読者

百名山や都市近郊の低山など、一般登山者を対象としたガイドブックが書店にはたくさん置いてある。インターネット上には、ブログや情報共有サイトなどを活用して、「土日で○○山に行つてきました！」と、自分の山行記録を発表している。情報が少なく、また情報発表する媒体が限定的だった時代ならざ知らず、山に関する情報がある程度整っている現在において、書き手が登った山について記すことを基本とする「山行記」

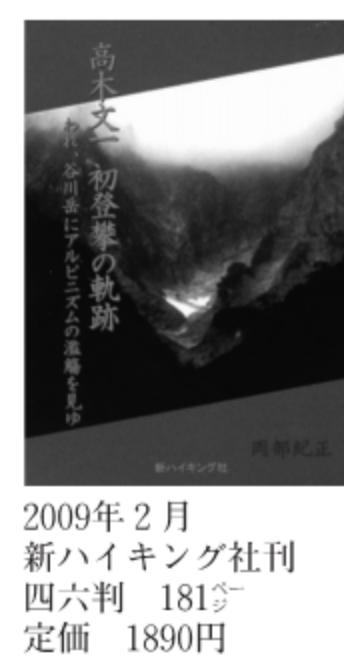
乗鞍岳、大菩薩嶺、積丹岳などメジャーな山もあるが、摩耶山（山形県）、鼻曲り山（長野・群馬県境）など、私が聞いたこともない山もあった。

山の中で出合った動植物、特に高山植物と鳥類の描写が多いところに、氏の自然への深い愛情を感じる。その裏返しとして、環境破壊への憎しみを露わにする箇所も少なくない。山岳地帯への道路建設、スキーフィールド開拓、高山植物の盗掘、外来魚の放流などのほか、山頂に「奉納」された「登山二十回達成」といった記念物に対する「山頂を汚す」と敵視する徹底ぶりだ。

一方で、著者が山スキーをするために、憎惡の対象であるスキー場のリフトを使うことに「良心の呵責を感じる」としながらも、意外とすんなり利用を受け入れているアンバランスさがなんとなくおかしかった。

読んだ後に山に行きたくなるかどうかが、山行記の評価のひとつ指標だと思う。私は本多氏が山スキーを楽しんでいる様子を思い浮かべ、まだ秋の盛りだというのにスキーに行きたくなつた。

（阪辻秀生）



『高木文一 初登攀の軌跡』

岡部紀正・著

昭和初期、草創期の慈恵医大山岳部に在籍し、バリエーション・ルート初登攀競争の華やかなりし頃の谷川岳（一ノ倉沢奥壁など）や北アルプス（鹿島槍東尾根、前穂高又白谷など）にいくつかの記録を持つ高木文一（1911-64）の軌跡が紹介されている。副題には「われ、谷川岳にアルピニズムの濫觴を見ゆ」とある。

著者岡部紀正（日本山岳会員）は慈恵医大の後輩であり、在学中に気鋭の病理学者であり山岳部の相談役でもあつた高木文一教授の指導を受けた。その高木らを含む慈恵医大山岳部員の昭和初期の記録に対する評価を『日本登山史年表』（2005年、山と溪谷社）で接したことが本書執筆のきっかけとなつたという。

高木文一の山登りは、2歳下の弟、高木正孝、そして彼らの盟友、

渡邊兵力らとともに、母校である旧制成蹊高校の尋常科（中学に相当）時代に始まり、文一が尋常科から慈恵医大の予科に転じた後も、また正孝と渡邊が高等科を経て東大へ進学した後も、彼らとのパーティを組むことが多かつた。

高木正孝は後に、戦前戦中の欧洲アルプス、戦後の日本山岳会のマナスル、神戸大学のパタゴニア、行方不明となつた南太平洋調査行（1962年）までの華々しい活躍で、渡邊兵力もまた南極やヒマラヤでの活躍、日本山岳会の副会長として知られるところであり、高木文一を語るにこの2人との関わりへの言及は欠かせない。

第一章・高木文一のプロフィール、第二章・初登攀の記録、第三章・高木文一の山日記から、第四章・登山の真髄、の各章には、正孝と渡邊の残した文章が多用され、著者が解説するというスタイルがとられている。第五章には医師である著者の「山岳遭難対策についての提言」があり、特に中高年登山者への啓蒙を意図しているが、これらは高木らの遭難一步手前の記録である。

(越田和男)



2009年5月
平凡社刊
A5判 144頁
定価 1260円

『悩んだときは山に行け！』 —女子のための登山入門

鈴木みき・著

イラストレーターの著者自らが描いたコミックエッセイである。「不本意なアルバイト生活の中で「自分探し」をしていた著者が、24歳で初めて山に出会つて魅了され、その「山への一途な想い」をひとつずつ形にしていく姿が本書に描かれている。

山小屋のアルバイトにはじまり、小屋泊りの縦走からテントを背負つての山歩きへとステップアップしていく様子（下山後にひとりで店に入つて、お酒を飲めるまでになつていてるたくましさだ）が、そのままサブタイトルの「女子のための登山入門」になつている。女性ならではの視点が際だつていることだ。

たとえば、山好きの彼氏とのテ

ント泊は「手際よくこなす彼がと

ても頼もしく思え」「宇宙のなかに2人しかいない」ようだつたけれど、彼女は彼に別れを告げて自分でテントを買い、「彼に追いつかない」と「自立しなきや」とひとりでテント山行をするようになる。怖くて眠れないしアクシデントが続出だけれど、オナラをしても自由だ。彼女が「自己責任」と「自由」という登山の醍醐味を、自分の力で軽やかに手に入れていく姿は気持ちがよい。これまで山の世界で語られることのなかつた視点で、特に男性には理解しにくい感覚かもしれない。

会報『山』前号巻頭の「涸沢フェスティバル」の報告にもふれられているように、山に若い女性の姿を見かけることが増えてきた。「アラサー」「アラフォー」と呼ばれ、「草食系男子」に対する「肉食系女子」とも呼ばれる彼女たちは、何を考え、どんな想いで山歩きをしているのか。本書には、そんな彼女たちの等身大の姿が描かれていて。何かに挑戦するのではなく、何かと競うのではなく、自然体で山を楽しむ彼女たちにエールを送りたい。

(三好まさ子)

図書受入報告 (2009年9月)

著者	書名	ページ・サイズ	出版元	刊行年	寄贈/購入別
藤津滋人	山、心の風景——エッセイ(2)	530p/21cm	山文舎	2009	著者寄贈
尾形好雄	ヒマラヤ初登頂 未踏への挑戦	360p/22cm	東京新聞出版部	2009	出版社寄贈
竹越惠藏	わが心の白神 世界遺産白神山地——竹越惠藏写真集	115p/25cm	日本カメラ社	2009	著者寄贈
山形県高体連地区登山部(編)	積雪期登山基礎技術講習会20年の歩み(昭和42年-61年)	191p/26cm	山形県高体連地区登山部	1987	発行者寄贈
山形県高体連地区登山部(編)	積雪期登山基礎技術講習会40年の足跡(昭和42年-平成18年)	147p/26cm	山形県高体連地区登山部	2008	発行者寄贈
白山風露	鳥海山恋歌——花心第3集	104p/19cm	長山昌子(私家版)	2009	佐藤淳志氏寄贈
牛島博能(編)	山岳写真の探究——日本山岳写真協会創立70周年記念出版	183p/26cm	日本カメラ社	2009	日本山岳写真協会寄贈
日本山岳写真協会(編)	目で見る日本山岳写真協会の70年	46p/25cm	日本山岳写真協会	2009	発行者寄贈
小泉武栄	日本の山と高山植物(平凡社新書 No.485)	238p/18cm	平凡社	2009	出版社寄贈



平成21年度第5回(9月度)理事会

日時 平成21年9月9日 18時30分～20時30分

場所 日本山岳会会議室

【出席者】 尾上会長、神崎・宮崎・藤本各副会長、成川・岡部各常務理事、太田・堀井・相馬・山川・野沢・永田各理事、深川・平井各監事、近藤・酒井各常任評議員

【委任】 中山・谷川・萩原各理事

【欠席】 森常任評議員

高原三平、小林義亮、佐野忠則、上野美裕
常務理事会担当 || 藤本慶光
●支部活性化プロジェクトチーム
チームリーダー || 石橋正美
メンバー || 太田晃介、石田要久、北原孝浩、三渡忠臣、廣田博、大久保春美、植木淑美、今田明子
常務理事会担当 || 神崎忠男
●山の日制定プロジェクトチーム
チームリーダー || 成川隆顕
メンバー || 堀井昌子、永田弘太郎、山川陽一、萩原浩司、江本嘉伸、谷久光
常務理事会担当 || 藤本慶光
●JACユースプロジェクトチー

1・JAC改革プロジェクトチー
ムの委員嘱託(案) (宮崎)
常務理事会担当とリーダーから各プロジェクトチームのメンバー
が左記の通り推薦されたので審議のうえ承認をお願いする。(承認)
●新法人移行プロジェクトチーム
チームリーダー || 吉永英明
メンバー || 宮崎紘一、岡部紘、
藤井正善、黒川恵、井

- 2・補助金等の受入れに関する情報公開依頼 (宮崎)
文部科学省スポーツ課から一般的な注意喚起の文書が8月11日付であった。当会においては該当なしと回答した。
- 3・第12回こども登山教室実施報告 (宮崎)
常務理事会担当 || 尾上 昇
会後援 (宮崎)
実行委員長小宮輝之氏 (東京上野動物園園長) から例年通り要請があつた。
(承認)
- 3・第17回日本山岳耐久レース (24時間以内) → 長谷川恒男CUP の名義後援(協力)依頼 (宮崎)
登山者に対する安全確保や環境保全に対する十分な配慮がなされるという前提で名義後援をする。
(承認)
- 5・会長交代挨拶 (宮崎)
同志社大学山岳会の会長交代 (新会長、大日常男氏、前会長、平林克敏氏) の挨拶・案内があつた。
- 6・日中韓三国学生友好登山報告 (宮崎・相馬)
第3回日中韓学生友好登山は中国青海省の玉珠峰で8月18日～27日の間開催され、無事終了し帰国した(隊長・吉永英明、医師・野口いづみ、学生9名、会代表・宮崎副会長が参加)。次回開催は日本である。
- 7・学生部「パンボチエ登山隊2009」出発報告 (相馬)
パンボチエ (Panpoche 6620メートル未踏峰、マナスルの北東約20キロ) をを目指し、隊員6名(隊長、蔵本悠介、中央大学山岳部4年)が8月19日に出国、9月上旬に予定通りBCを設置した模様(9月登攀、10月中旬帰国予定)。
- 8・秩父宮記念山岳賞応募状況

(宮崎)

応募締切り期限は8月31日で2件の応募があつた。10月に審査委員会を開催する予定。

9・第3種郵便定期調査資料提出 (宮崎)

平成21年度の定期刊行物発行部数、発売状況の調査報告書を麹町郵便局宛に8月21日付で例年通り提出した。

10・『山岳』編集報告(成川)

『山岳2009年』の編集作業は順調に推移しており、例年より2カ月程度早く印刷完了の見込み。10月中旬には会員宛発送予定。

11・会報『山』9月号編集報告(神長)

ルーム日誌 9月

1日 図書委員会

2日 常務理事会

3日 山の自然学研究会

5日 り山の会

7日 総務委員会

8日 アルパインスキークラブ

システムプロジェクト アルパインスケッチクラブ

ルーム日誌

会員異動(9月)

9日	理事会	山想俱楽部	坂井 真	(4048)
10日	千葉支部	高尾の森づくりの会	福野敏樹	(11415)
11日	九五会	資料映像委員会 会報編集委員会 アルパインスキークラブ	友坂 進	(12289)越後
14日	山岳研究所運営委員会 アルパインスケッチクラブ	山岳定款検討委員会 休山会	千葉支部 三水会 つくも会	友坂美智子(12761)越後
15日	アルパインスキークラブ	科学委員会 自然保護委員会	野村哲夫 (13366)関西	退会取消
16日	00会	会定款検討委員会 休山会	会定款検討委員会 休山会	野村哲夫 (13366)関西
17日	千葉支部 三水会 つくも会	アルパインフォトビデオクラブ	■2月の会報の会員異動で退会とあります。が、8月本人の申し出により退会を取り消しました。	■2月の会報の会員異動で退会とあります。が、8月本人の申し出により退会を取り消しました。
18日	千葉支部 三水会 つくも会	アルパインフォトビデオクラブ	友坂美智子(12761)越後	坂井 篤 (12200)09.9.23
24日	海外委員会 図書管理委員会	海外委員会 自然保護委員会 アルパインスキークラブ	福野敏樹 (11415)	09.9.23
25日	法人化検討委員会 山遊会	法人化検討委員会 山遊会	友坂美智子(12761)越後	09.9.23
28日	総務委員会 インターネット小委員会	総務委員会 インターネット小委員会	野村哲夫 (13366)関西	09.9.23
29日	麗山会	山岳編集委員会 山の日制定プロジェクト ゆきわり会	会定款検討委員会 休山会	09.9.23
30日	9月来室者511名			

年次晩餐会は「花の山」をテーマにしました

12月5日(土)、年次晩餐会を開催します。

今回は、会場を変え100周年記念祝賀会で使用した「飛天」です。恒例の「秩父宮記念山岳賞」受賞および受賞者による基調講演、海外基金登山隊の登山報告以外に、「花の山」をテーマに、各支部の魅力的な花の山をパネルで紹介します。また、高山植物の魅力を山岳写真、スケッチなどもあわせて展示します。ご期待ください。

(詳細は10月に送付します「晩餐会のご案内状」をご覧ください)

日 時 平成21年12月5日(土)

場 所 グランドプリンスホテル新高輪「飛天」 総務委員会

平成21年度(後期)「海外登山基金助成登山計画」募集 海外登山基金委員会

日本山岳会では登山界の活性化を目指し、優れた海外登山計画に対して「海外登山基金」による助成を行なっています。第21回目となる今回も、困難を求めての挑戦、発想の新しさ、夢多い計画など、ユニークな登山計画を支援したいと考えています。

登山には多様なスタイルと発想があるはずです。ピークを目指すだけの登山ではなく、新しい課題に挑戦していく意欲も大切なことでしょう。パイオニア精神にあふれるさまざまなジャンルの計画であれば歓迎したいと考えます。会員資格やパーティ編成等の条件は問いません。奮ってご応募ください。

記

- 対象 平成22年2月1日～平成22年7月末に海外の山へ出発する登山隊
- 申込方法 所定の様式(事務局にご請求ください)に記入し、登山計画書(15通)を添えて申請してください。
- 申込締切 平成21年12月31日
- 審査と助成期間 平成22年1月中に審査し、理事会で決定、助成。なお、対象となった登山隊は後日、登山報告書の提出を必ずお願いします。J A C会報『山』に掲載します。
- 助成金額 120万円(平成19年度実績)
- 問合・申込先 日本山岳会事務局
電話 03-3261-4433

◆語り継ぐ日本山岳会の歴史 歴代会長「あの頃、そして未来の メッセージ」 資料映像委員会

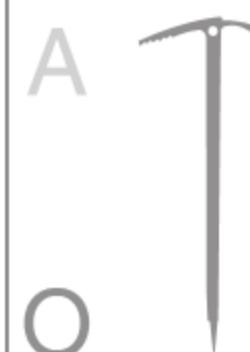
連続講演会第2回目は、18代会

長、村木潤次郎氏。戦後の北海道・ペテガリ岳をはじめ、1953年第1次隊から3次隊までマナスル登山隊に参加。59年には、日本山岳会ヒマラチユリ登山隊で隊

長を務める。95年に18代会長に就任。同年、マカルー東稜を成功させ、10月開催の創立90周年記念事業を推進された。

日時 11月14日(土)14時～16時
場所 日本山岳会集会室
問合 羽田栄治(TEL & FAX 03-3399-3975)
*講演会終了後、村木氏を囲む会

INFORMATION



を予定。希望者は当日、申し出でください。

◆第19回山を語る「女性の中村テルさんの時代」 図書委員会

女性の活動が制約をうけた昭和初期に、山に登り、外資系企業で働き、時代を切り拓いた中村テルさん。美しく凜々しい大先輩の姿を、小倉董子さんに語っていただきます。

日時 12月14日(月)18時30分より
場所 日本山岳会104号室
問合 三好まさ子(TEL 090-8191-8601)

✉ 344mm@mbe.nifty.com

◆「上高地ヨガ」年末年始オープンについて 山研運営委員会

正月を上高地で過ごしてもらおうと、山研を臨時にオープンして

8年目となりました。今年も年末年始の5日間、委員が常駐し皆様のご利用をお待ちしております。

期間 平成21年12月30日(水)～22年

申込 11月末までに、柴山信夫
(TEL 044-900-3439)

*申込者に詳細を送ります
✉ sibasan@sannet.ne.jp)

◆ヒマラヤ・トークショー

海外委員会

海外委員会では、ヒマラヤ登山に精通した講師を招いて「ヒマラヤ・トークショー」をシリーズで開催します。

①「知られざるヒマラヤの山々」
講師 大西保

日時 11月14日(土)14時～17時
講師 竹花晃

②「身近なヒマラヤの山々」
講師 竹花晃

日時 12月12日(土)14時～17時
講師 近藤和美

③「魅力あるヒマラヤの山々」
講師 近藤和美

日時 平成22年2月6日(土)14時

伯耆国山岳美術館



入館料 大人400円、小人200円
友の会員、日本山岳会員は無料。
開館時間 10:00~17:00
休館日 毎週月曜日・祝日の場合は翌日。その他お盆、正月、臨時休館することがありますので電話にてご確認下さい。
交通機関 米子道溝口ICより伯耆大山に向かい3分。JR:米子駅、伯耆溝口駅よりタクシーをご利用下さい。高速バス:溝口IC下車、徒歩10分。

〒689-4213 鳥取県西伯郡伯耆町金屋谷943
TEL 0859-63-0396

伯耆大山の西裾野・山の中の小さな美術館

伯耆国山岳美術館は、鳥取県西部にある山陰の名峰「伯耆大山」の西裾野に位置する山の中の小さな美術館です。平成5年12月12日「山岳文化の振興、地域文化の振興」を基本理念として、日本山岳会の会員をはじめとする多くの岳友の皆様のご支援と地域の友人に支えられて、伯耆大山・西裾野の文化ゾーンの形成を目指して開館いたしました。

現在の展示内容は日本山岳会より寄託されている「或る朝の槍ヶ岳(足立源一郎)」などの油彩画、山岳画家・山里寿男の「伯耆大山・縦走路」、伯耆大山を巡るスケッチ、山陰地方を活動拠点とする洋画家の自然あるいは地域の生活をモチーフとした作品20点を常設展示しています。

館内は大展示室、小展示室、喫茶室、受付ホールで構成し、大展示室は有料の常設展示場、小展示室は山岳図書室兼用で無料貸出展示室、喫茶室では自家栽培、自家製粉による手打ち蕎麦を提供しています。

友の会(会員数250名)では美術館情報、伯耆大山などの山情報を掲載した会報を年4回発行。会員を対象とした登山教室を毎月開催し、山を安全に楽しむための啓蒙活動と自然保護の活動を行なっています。

また、日本山岳会会員は入場無料となっております。山の帰りに、ぜひ、お立ち寄りください。

い。
り山研でご用意します。
「自炊」のために山研宿泊をためらつていた方々、ぜひご利用ください。

山研にお申し込みください。ご飯とみそ汁(350円)は今まで通り山研でご用意します。

0円です。宿泊日前日16時までに山研にお申し込みください。ご飯とみそ汁(350円)は今まで通り山研でご用意します。

日本山岳会会報 山 773号

2009年(平成21年)10月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンピューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会长 尾上 昇
編集人 神長幹雄
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印 刷 株式会社 双陽社

◆山研からお知らせ◆

本来「自炊」が基本の山研ですが、他施設の食堂に仕出しの「おかず」を注文できるようになりました。夕食600円、朝食450円です。

山研にお申し込みください。ご飯とみそ汁(350円)は今まで通り山研でご用意します。

「自炊」のために山研宿泊をためらつていた方々、ぜひご利用ください。

- 規模はそれほど大きくないものの、学生部からふたつの海外登山が実現しました。高所への挑戦であり、未踏峰へのアタックでした。山岳会の高齢化が言われる昨今ですが、次世代を担う彼らの若い力に期待したいと思います。
- 日本山岳会の副会長である神崎さんが、日本山岳協会の副会長にも就任されました。大きな組織の幹部を兼任され、日本の登山界を大所高所から俯瞰できる立場になりました。そこで登山界の現状をレポートしてもらいました。
- 今年の夏山は天候不順でさんざんでしたが、秋になると好天が続き、特に9月のシルバーウィークと10月の連休は素晴らしい秋山日和りに恵まれました。抜けるような秋空のもとで、やっぱり山はいいなと思いました。(神長幹雄)

◆編集後記◆

④ 「化石化したヒマラヤ登山隊」
講師 神崎忠男(予定)
日時 平成22年3月27日(土)14時
各回共通 17時

場所 I C I クラブ6階「アース
プラザ」
(千代田区神田小川町3-6
TEL 03-3259-0081)

定員 80名
資料代 500円(学生無料)

申込 海外委員会事務局・今田までファックスかメールにて
FAX 03-5386-0648
✉ imada@mwa.biglobe.ne.jp)